

第十三章 新しい門出

1 三祐株式会社の設立

黒四ダムのような仕事をしたい！

昭和三十年、戦後も十年を経過すると、講和条約も締結され、日本経済復興のための諸事業が始まってきた。食糧増産の土地改良事業としては北海道の開発、八郎潟の干拓が考えられてきた。

とくに電源開発として佐久間ダムの建設に外資が導入され、日本アルプスの雪どけの豊富な水を、日本一の急流黒部川に日本一高いアーチダムを建設、発電するなど、日本経済復興の計画も本格的に進められてきた。黒四ダムは、アーチダム本体は間組が施工し、発電所はダム地点より下流五キロの地点にあり、発電所までの間は高圧トンネルで導水する計画にて、佐藤工業が請け負った。この高圧トンネルは、岩盤を掘削して、コンクリートフェーシングしたのみでは、漏水のおそれがあり、岩盤掘削中に出水を止めなければ完全な圧力トンネルができないので、トンネル掘削しながら掘削面からの漏水を防ぐ必要がある。

そこで、トンネル掘削と同時に漏水面をグラウト工により漏水防止しながら作業を進めて

行かなければならない。非常に難工事であると同時に、高度な技術を要する。また、新しい機械設備を必要とした。その工事を担当したのが大和ボーリング株式会社で、責任者が長島国雄であり、その機械を売り込んだ人物が小川雄之助であった。

このような工事で黒部ダムの次に必要な現場は、牧尾ダムだろうとにらんで、牧尾ダムのグラウト工が受注できるように長島国雄も小川雄之助も農林省の技術者と接触をはかっていた。

その当時、久野彦一は愛知農林物産倒産のため、失職して農林省木曾川調査事務所の臨時運転手をしていた。

そこで、長島も小川も愛知用水の建設技術習得のため、アメリカに派遣された技術者、畔柳嘉男、上滝要美^{かなめ}、内藤正、江川了など、また国内で待機していた長柄要、山下源彦、山田光敏などに久野彦一を紹介して、彼にその技術を習得した会社を設立させ、久野彦一を再起させようと考えていた。

久野彦一もまた長島国雄、小川雄之助の話聞き、現在の「大和ボーリング」のような会社を設立して再興したいと考え、畔柳、上滝などにその将来性、可能性を聞きに行った。二人とも久野一家の惨状を見ており、何とか協力してやりたいと考えていたので、その仕事の将来性、可能性については充分な見込みのあることを話して会社設立に賛成し、できるだけ協力をすると力づけてくれた。そこで、親父久野庄太郎さんにも、大阪の叔父であり岳父である金之助にも相談し賛成を得た。

黒四ダムの仕事に下請けとして参加

ところが、肝心な庄太郎さんは自分も破産の係争中であり、新会社を設立しても役員となることができない。そこで浜島と相談し、当時、愛知用水土地改良区の常務理事の久野源蔵に責任者（社長）になってもらい、資金面でも協力をしてもらおうよう頼んだ。

そして大阪の岳父久野金之助にその会社の専務、浜島が常務で会社を設立し、実質的には社長は久野庄太郎、専務は久野彦一ということを進めることにした。株式もかつて愛知農林物産株式会社に協力し、破産の被害を受けた人たちを含めて多くの人びとの協力を得て、一株五百円、八千株、四百万円の株式会社三祐商店を設立した。長島国雄、小川雄之助も常務取締役で会社に必要な技術者も引き連れて参加してくれ、その日からでも仕事にかかれる態勢ができ上がった。

時に昭和三十年四月十日であった。

三祐商店設立時には、未だ黒四ダムのトンネル工事は始まっていなかった。そこで、工事開始と同時に大和ボーリング株式会社の下請けとして、社名も三祐株式会社と改め、工事に参加することができた。

大和ボーリングからきた技術者も、新会社の雰囲気合ったのか、喜んで働いてくれ、設立間もないのに黒字を出すことができた。

2 愛知用水模範農場の計画

昭和三十四年秋も深くなった頃と思う。金山橋で食肉販売業をしている久野平一（庄太郎の三弟）より、J R 大府駅付近で列車からよく見える所に「伊藤ハム」の広告看板を建てる土地を探してくれないかとの話があり、さっそく、久野庄太郎、平一、浜島の三人で、東浦農協の専務理事水野源式を訪ねた。水野と東浦町の森岡付近を見て廻ったが、武豊線からはよく見えるが、J R 本線からは見えにくい。大府地内の方がよいかたと話している時に、水野から、巽ヶ丘の東の丸池山に三万坪（九、九〇〇平方メートル）の土地があるので買ってもらえないかとの相談をうけた。

全農地を失った久野さんは、用水ができて水が来た時に、新しい農業の見本農場をしたいがそれができないと寂しがつていることを知っているので、三祐株式会社より、五回払いで代金を出してもらい、その土地を買うことができた。

ところがその後、巽ヶ丘が宅地として開発され、丸池山も一部を残して名鉄に買い取られ、その代金で、三祐株式会社から借用した購入代金を返済した。

残っていた土地が、周囲の環境変化で坪価額の急上昇により、久野彦一が遺産相続税の対象となり、多額納税者リストに挙げられたのが真相である。

3 愛知用水幹線水路の案内 (本書一六九頁の附図参照)

愛知用水公団(昭和三十年九月発足)側の要望により地元の希望路線について、昭和二十三年十月作成の二千五百分の一の地図に基づいて浜島が各工区長を案内した。(この案はすでに農林省時代に松田専門官と検討済み)

(1) 第一工区(工区長 佐野鑑尔) 取入口——愛岐トンネル出口

取入口兼山について、兼山ダムの満水標高九四・五メートルより三メートル下で、最小限毎秒三〇立方メートル取水できるようにお願いした。水路は木曾川と兼山の街並みとの間を暗渠で流下する計画を私は話したが、将来、木曾川の流心の変化を考え、トンネルで兼山城の下を抜く案が検討された。今井、入鹿、犬山の入鹿池上流を通す案も話したが標高が高いので、水路橋で流す現在の計画となった。

(2) 第二工区(工区長 松竹兼義) 愛岐トンネル出口——高蔵寺サイフォン

入鹿池の権限を侵さないように、できれば渇水時には入鹿用水に分水できることも提案したが、無理とのことであった。富士トンネル、白山トンネルを経て高蔵寺サイフォンまで。第三工区長日比野文雄が地元であるので、必要なことは相談に乗ってもらった。

(3) 第三工区(工区長 日比野文雄) 高蔵寺サイフォン出口——海老池

瀬戸市に近く幡山地内を通り長久手で香流川を渡り、日進はできるだけ山側を通って海老池に入るように依頼す。

(4)第四工区(工区長 星野義二) 海老池——八幡サイフォン入口

海老池にいたり、適当な所で二〇メートルの落差工をとるところを探す。現在の名鉄駅の近くで一休みしていた。地形をながめて、私が、「あそこを締め切つたらいい池ができるね。ここらで落差ができるかしら、この下の部落が東郷村の諸輪というがね。地質は第三紀新層の猪高層。谷間は、始良^{シラ}火山の火山灰(硅砂)で埋められている(約二、三万年前)」と言うと、星野も乗り気になって「面白いね。今までの日本の常識では、二〇メートル以上の土堰堤を作るのはむりだが」、「アメリカさん(E・F・C)は何と言うか」。貯水量は下の鞍部なら二千万立方メートル。上の鞍部なら一千万立方メートル近いが(?)と思う。

これから先は地形が標高五〇メートルを切るところが多くなる。その日はいまの和合ヶ丘付近で二〇メートルの落差を取つてゴルフ場の東端で姫街道をサイフォンで渡り、千子の池の上を通り、白土から豊明の若王子池、勅使池の上流を諸木付近から豊明の濁池の上に出て、中京競馬場の西を桶狭間古戦場では旧東海道と国道一号线と名鉄電車をサイフォンで越し、文久山から水主ヶ池^{かこ}、J Rをサイフォンで越す。旧飛行場まで、ある所は盛り土を要するところもあり、大府、横須賀街道をサイフォンで越し、加木屋大池の手前で東浦支線をポンプアップし分水する。

(5)第五工区(区長 小島^{みづら}盈) 八幡サイフォン——師崎

八幡ポンプアップをやめ、支線ごとの小ポンプにした。

本線は、太田川左岸に渡り、七曲、佐布里の加世端池の上を多賀神社まで南下、矢田、久米と半島の西斜面を南下、内福寺にいたる。必要な支線はポンプアップ、内福寺以南は師崎支線としてポンプアップ、師崎にいたる。

東郷池計画。上流で締め切れば、九〇〇万立方メートル、下流なれば一二五〇万立方メートル、E・F・Cは通称「みがき砂」の粒度分析をして大丈夫、ブランケット工法を採用すれば、ほとんど漏水は防げること。これによって、毎秒八・五立方メートルの調整ができ、当初考えた一〇個の調整池（約二千万立方メートル）が不要となる。素晴らしい発見とほめられた。

(6)第六工区（区長 斎藤^{まよあき}匡明）

中止となった補助溜池、鎌ヶ谷池（横須賀）、明治池（東浦）、半田池（半田、常滑、阿久比）、旭大池（知多）、明神池（内海）、椎池（常滑）、長成池（武豊）、青山池（野間）、勅使池（豊明）。六工区は、岐阜県の松野池は防災溜池として岐阜県に委ねたので、三好曲池に調査が集中、着工第一号となった。（昭和三十二年十一月五日）

一方、久野さんは、東郷池の用地買収が難航をきわめて、村長野々山^{つくだ}佃と近藤眞夫農協組合長とが諸輪の地権者と直接話し合い、地籍が一坪一反歩という変則を克服し、実測をしたり、農林省農業試験場を誘致したり、久野源蔵とともに奔走、苦勞して諒解にこぎつけた（むかし、成瀬隼人守の鎮地で特殊地域であった）。

4 愛知用水公団となって計画の変わったこと

① 牧尾ダムについて

(イ)その後、調査の結果、二子持ダムサイトは旧王滝川の河床で土被りが非常に深く、鉄筋

コンクリート型式のダムは適しないこと、近くに適当なコア材料が得られれば、中心コア方式ロックヒルダムに変えた方が得策であることが明らかになった。さらに調査の結果、不透水部アースコアに適した材料が充分に建設地点の近くから得られること、および、すぐ近くの採石場にある砂岩が量・質ともにロックヒルに使用するに十分であることがわかって、牧尾橋地点にダムサイトを変更した。

(ロ)旧河床の土質について、数本のボーリングを行った結果、各層のサンプルについて粒度分析を行い、透水係数を計った。このデータを入念な現地試験から判断すると、この旧河床はクラウトまたは特別の措置を行わなくても十分に不透水性であるとの結果が出た。

② 幹線水路について

(イ)幹線路線変更は、名古屋市の東方、おおむね瀬戸から有松に至る二二キロの区間で暗渠が多くなった。その主なる原因は、将来の都市化、住宅化を考え、地上構造物を避けた。

(ロ)八幡揚水機場の廃止により、下流二五キロに影響を及ぼした。これは幹線水路の位置が当初計画より低い標高に置かれ、そのため八幡揚水機場から下流の支線水路の一部は用水機場が必要になるが、八幡揚水機場で総量を揚水するよりも費用が安くなり、支線ごとの揚程をとったので、現地に適した支線計画ができた。

(ハ)トンネルの延長が約一一キロ減少した。

(ニ)水路の舗装(以下ライニングという)問題について研究した結果、急な側壁と厚いコンクリートライニングは土質試験の結果、薄いライニングか、もしくはライニングの必要のないことがわかった。また、掘削の土量の増加は、高額の用地費とバランスするため特

筆する問題のないことがわかった。

(ホ)幹線の取水口は兼山ダムを利用せず、その上流三〇〇メートルの位置に自動取水する計画に変更。

(ハ)幹線水路の水位を流量に関係なく、自動調節装置（ネルピックゲート）により調整することを計画する。

③ 地区内調整池について

最初の計画の二子持から牧尾橋地点にダム位置が変更されて、受益地内に一〇カ所の貯水池を拡大して一、五〇〇万立方メートルの不足分を補う計画が東郷池の発見により、松野池、三好池のほかは建設不要となった。

④ 電力施設について

一万キロワットに見積もられていた一基の発電機だけで標高八八〇メートルから八四二メートルまで貯水位の範囲で操作できることとなった。

5 吉田前総理に御礼と報告に参上

昭和二十九年十二月六日、混迷した政界状態の中で吉田内閣は総辞職し、鳩山内閣が成立した。翌昭和三十年八月中旬、吉田さんに愛知用水建設決定の御礼を申し上げようと電話をしたところ、「箱根大湧谷の三井の別荘にいるから来い」とのことであった。さっそく久野

さんと私の二人で出かけた。

大湧谷は箱根の頂上を小田原の方に下って、八合目付近から強羅と反対方向に谷を下ったところにあった。静かな谷間にあり、夏を忘れさせた。

吉田さんは例のガウン姿で寛いでおられ、話がはずんだ。首相の大任を解かれて、ほっと一息というところか。

「鳩山（当時の首相）がなあ、再軍備（自衛隊の強化か？）をやると言っているが、きつと失敗するぞ。まだ早い。日本は戦争に巻き込まれてはいかん。アメリカは日本と中国（共産党）と対抗させ、日本を共産主義の防波堤にしようとしている」と吉田さんは言われた。

久野さんが、

「中国の毛沢東が吉田さんに会いたいと言ったらどうしますか？」
と質問すると、

「そんなことはない。俺は中国料理（暗に共産党を意味したようだ）は嫌いだしな。それに第一、中国なんかに出かける金がないよ。共産党のわけのわからんパワーには困るよ。アメリカのハガチーが俺に会いに来たが、群衆に囲まれて動きがとれないんだ。ハガチーは『日本の警察は弱い』と言ってこぼしていた。俺はハガチーに『世界一強くて困った日本の警察を弱くしたのは誰だ』と言ったら、『うーん、そうか』と言って笑ってしまった。警察は弱すぎても強すぎても困る。とにかく共産党はわけがわからんで困る」

と吉田さんは言われた。

「日本はこれからは佐藤と池田の時代になると思う。佐藤は経済を知らぬが、池田は経済を知っている。これからは経済の時代だ」（のちほど吉田さんは池田さんの所得倍增政策を予測し

ていたのかと思った)

久野さんが、

「時に先生、私の親しい人で柘植文雄という書の大家がいますが、吉田さんの字は見事だ。とくに習字がよくできていると言ひ、今度お会いしたら、手本をいただいて来てもらいたいと言っておりました」

と言うと、吉田さんは、

「いや、元来の悪筆でな。しかも無精で習字しないからだめだ」と言いながら、葉巻で空書しておられた。

実はその日は、愛知用水が順調に進んでいる御礼にうかがったのであった。私からその御礼を申し上げたところ、それはよかったと大変なお喜びであった。ところが、

「久野庄太郎が破産しました」

と申し上げたら、吉田さんは、

「なんだ、破産したか。うん」

としばらく考えていて、

「愛知用水、久野庄太郎破産、ええじゃないか。立派なものだ」

と言われた。(久野さんはその時のことをあとで、「私も心の中で本当に満足していたので、吉田先生から言われて本当に嬉しかった」と述懐している)

吉田さんはしばらく考えていて、秘書の安齋さんと呼んで墨と筆を用意させて、目の前で書かれたのが墨痕鮮やかな、

「桃李不言下自為蹊」

という書であった。

「桃や李は何も言わないが、みんなが花見や実を取りに来て、その下に自ずから道ができる。すなわち、良いことをすれば人が慕って集まってくる」という意味であった。久野さんは吉田さんから直々に書をいただき、嬉しそうであった。

帰りの汽車の中で久野さんが私に聞いた。

「吉田さんが書いてくれた書の意味はいったいどういうことだね。せっかく書いていたのに百姓の私にはよくわからぬ。吉田さんにお聞きするのも気がひけるので、だまって帰ってきた」

私が大体の意味を説明すると、久野さんは、自分のことをこんなふうに表示してくれたと大変な喜びようであった。この日のことを、

「私は破産して人様にご迷惑をかけたことは本当に相済まぬことをしたと思っているが、不十分ながら弁済すべきことは弁済し、私は無一物になったが、これでよいと思っていたところ、吉田さんから素直にお褒めの言葉をいただいで心晴れ晴れとした」

と久野さんは『躬行者』の中で書いている。